

令和 7 年産小麦の作況と麦類の当面の技術対策

米 麦 畜 産 課
(農産振興室)

生育の概況	乾燥傾向であったが、3月の降雨により11月播種ほ場の生育は平年並になっている。12月播種ほ場は依然生育が遅れている。分けつはやや多く、草丈は短い傾向。現在の作柄は「並」が見込まれる。
作業の進捗状況	除草剤散布、赤かび病防除・開花期追肥準備、排水溝の整備

1 気象経過（前橋橋地方気象台データの平年比、3月は20日まで、参考資料参照）

項目	11月	12月	1月	2月	3月
平均気温	+1.5℃	+0.3℃	+1.3℃	-0.3℃	+0.3℃
降水量	140%	-%	20%	4%	245%
日照時間	105%	115%	115%	106%	85%

2 生育概況

(1) 概要

12月から2月末まで乾燥傾向で続いていたことから、一部で下葉の黄化や葉先の枯れが見られ、は種時期の遅速による生育差が大きくなっていた。3月上中旬にまとまった降雪があり、停滞気味であった麦の生育が促進され、11月に播種したほ場の生育は平年並となっている。一方、12月以降に播種したほ場は依然として平年に比べ遅れている。分けつは、適期播種ほ場でやや多く、播種が遅れたほ場ではやや少ない傾向。草丈は全体的にやや短い。二条大麦の生育は平年並。

今後、気温が高く推移すると出穂期はやや早まることが予想されるため、凍霜害の発生や、生育が旺盛なほ場では病害（赤かび病、うどんこ病）や倒伏の発生が懸念される。

(2) 病虫害・障害等の発生状況

病虫害は目立った発生は無いものの、3月上中旬の降雪により一部ほ場で滞水による湿害が発生している。

雑草は、乾燥傾向のため平年より少ないが、スズメノテッポウ、ネズミムギ、ヤグルマギク、ヤエムグラ、カラスノエンドウの発生が見られ、3月に入りアカザ、ナガミヒナゲシが増加している。

(3) 作況は等の調査結果

作況は（さとのそら）のデータ平均は、播種期は11月25日（過去平均比+3日遅い）、3月20日現在の草丈が22.6cm（同81%）、茎数が1,182本/㎡（同113%）、幼穂長が3.1mm（同69%）となっている。

農業技術センター稲麦研究センターの生育基本調査結果（小麦「さとのそら」、11月14日播種）では、3月20日現在、草丈が22.0cm（過去10カ年平均比78%）、茎数が766本/㎡（同79%）であり、幼穂形成始期は3月3日（同+2日）、節間伸長始期は3月19日（同±0日）となっている。

(4) 作柄のまとめ

小麦の作柄は、各地区とも全て「並」であることから、県内の平均作柄は「並」が見込まれる。

表1 小麦作況は調査結果（さとのそら）

地 区	播 種 期	2 月 20 日		3 月 20 日		
		草 丈 cm	茎 数 本／㎡	草 丈 cm	茎 数 本／㎡	幼穂長 mm
平 均	11 月 25 日(+3 日)	12.1(102)	760(75)	22.6(81)	1,182(113)	3.1(69)
前 橋 市	11 月 18 日(-)	9.1(-)	768(-)	23.8(-)	1,082(-)	4.0(-)
伊勢崎市	11 月 24 日(+2 日)	11.8(103)	717(69)	16.8(61)	887(108)	2.8(50)
高 崎 市	11 月 21 日(+4 日)	11.6(92)	748(68)	22.2(79)	1,147(114)	3.4(55)
太 田 市	12 月 3 日(+4 日)	11.7(115)	521(96)	21.0(93)	940(101)	2.0(94)
千代田町	11 月 22 日(+3 日)	13.3(103)	1,053(78)	30.4(91)	1,752(123)	4.2(102)

*各地区の()内は過去の平均値に対する日数および比率(%)。

日数の「-」は早い、「+」は遅いことを示す。

過去の平均値は、前橋市は令和 6 年ほ場変更により過去値なし、伊勢崎市は過去 3 年、高崎市は同 5 年、太田市は同 10 年、千代田町は同 3 年の値。前橋市は県平均から除外した。

表2 農畜産課・地区農業指導センター管内の麦類の作柄概況

地 区	県平均	中 部	伊勢崎	西 部	東 部	館 林
作柄概況	並	並	並	並	並	並

3 技術対策

(1) 排水対策

排水対策を未実施のほ場では早急に排水溝等を設置する。実施ほ場においては排水溝の確認や手直し等を随時実施し、ほ場の過湿を回避する。

(2) 追肥（実肥）

パン用小麦品種「ゆめかおり」は、赤かび病の防除との同時作業による尿素溶液 4 ～ 8 %での葉面散布や開花期頃に窒素成分で 2 ～ 4 kg の追肥を実施し、タンパク質含量の向上を図る。

(3) 病虫害対策

麦類のデオキシニバレノール、ニバレノール（赤かび病の病原菌が産生するかび毒）汚染防止のため、赤かび病防除を必ず実施する。各麦種の防除適期は、小麦が開花始期～開花期（出穂 7 ～ 10 日後頃）と開花 10 ～ 20 日後、二条大麦が蒴殻抽出期（穂揃期 10 日後頃＝出穂 12 ～ 14 日後頃）、六条大麦が開花始期～開花期（出穂 3 ～ 5 日後頃）である。

うどんこ病やアブラムシは、発生状況に応じて防除を行う。「つるぴかり」「きぬの波」はうどんこ病に弱く、過繁茂のほ場で発生しやすい点に留意する。

(4) 雑草対策

収穫物への種子混入が問題となるカラスノエンドウ等は確実に処理する。カラスムギやネズミムギ等の難防除雑草は、周辺ほ場への拡散や翌年の多発につながるため、発生量が少ないうちに抜き取りを行う。ほ場をよく観察し、殺草限界前までに適切に処理するとともに、除草剤の使用晩限を超えないよう注意する。

(5) 凍霜害対策

出穂期までの低温危険期の天候に留意する。小麦は幼穂長 3 mm のときに - 2℃以下、20mm のときに 0℃以下の低温で幼穂凍死が発生する。幼穂凍死は低温日から 4 ～ 5 日後の幼穂の変色や新葉が抽出したときの黄化症状などにより確認できる。また、幼穂が凍死すると遅れ穂が発生するため、収穫時期に留意するとともに、調製を丁寧に行い、未熟粒の混入を防止する。

不稔粒は、出穂 8 ～ 10 日前の - 1℃以下の低温遭遇や、出穂前後の降霜などにより発生する。不稔粒は赤かび病の発生を助長するため、適正に防除を行う。

【参考資料】

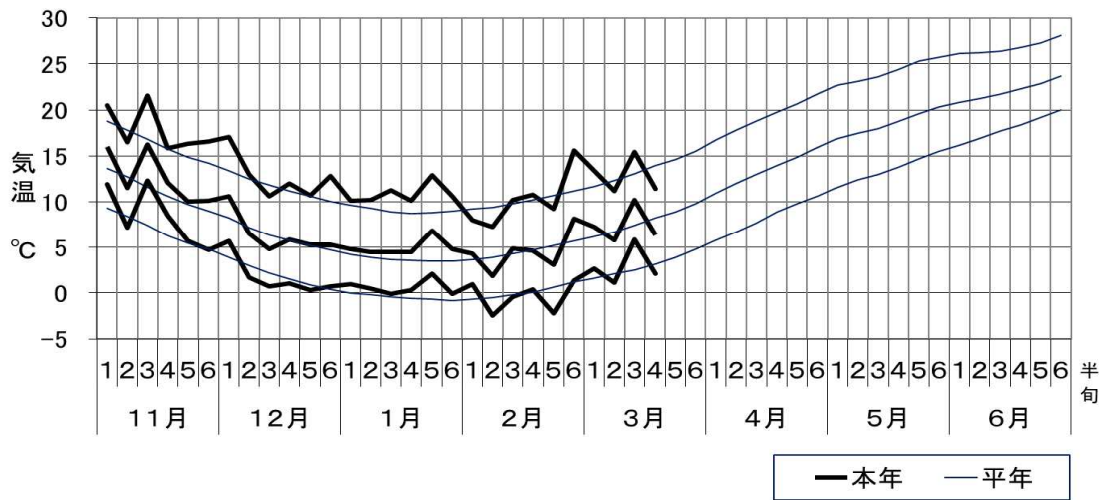


図1 麦作期間の気温（前橋地方気象台）

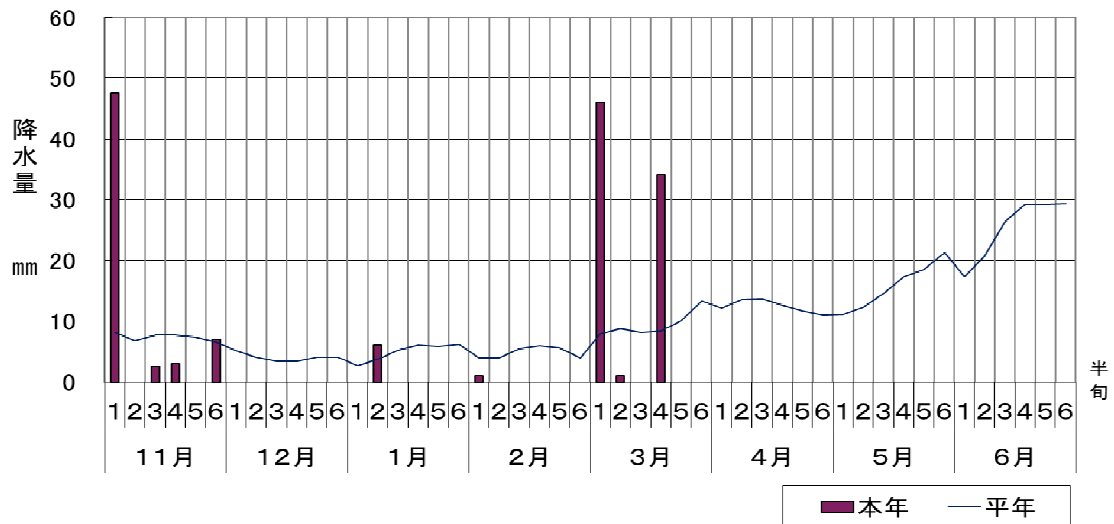


図2 麦作期間の降水量（前橋地方気象台）

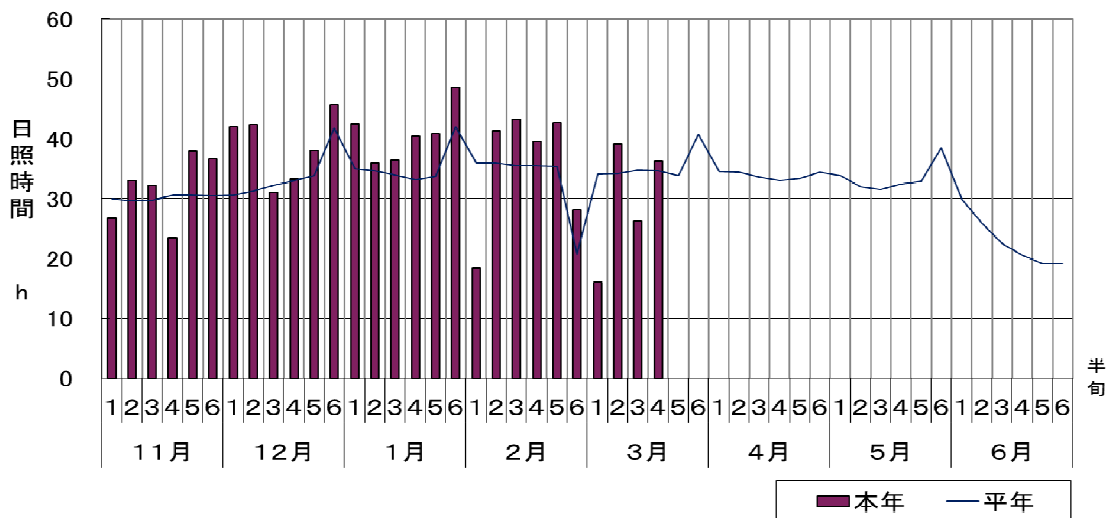


図3 麦作期間の日照時間（前橋地方気象台）